

1 主題設定の理由

(1) 生徒が生きる未来

国は、第3期教育振興基本計画期間中の課題の一つとして、コロナ禍の影響を次のように挙げている。「新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、留学をはじめとするグローバルな人的交流が激減したほか、様々な体験活動の停滞をもたらした。」(新たな教育振興基本計画(令和5年6月15日))さらに、「現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字5を取って「VUCA」の時代とも言われている。(同計画)」と社会の現状を位置づけ、今後の教育政策に関する基本的な方針として次の2点を挙げている。

- ① 2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成
- ② 日本社会に根差したウェルビーイングの向上

その上で、今後5年間の教育政策の目標と基本施策として16の目標掲げている。その目標1「確かな学力の育成、幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成」の基本施策には、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」や「新しい時代に求められる資質・能力を育む学習指導要領の実施」が挙げられているが、その出発点は「令和の日本型学校教育」(「中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)(2021,1)」)である。予測困難な時代を生きるために、社会全体のデジタル化・オンライン化、DX(デジタルトランスフォーメーション)は必須であり、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることの重要性は広く認知されるようになった。

では、これらを踏まえ現在の中学生に必要な資質・能力とはどのようなものか。学習指導要領(平成29年告示)では、国語において育成することを目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

また、答申別紙において言語能力を構成する資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したものとして、以下のように示している。

《知識及び技能》

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解が挙げられる。

《思考力・判断力・表現力等》

テキスト(情報)を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

《学びに向かう力・人間性等》

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

これらは、学習指導要領国語科の領域、指導事項の構成に反映されており、未来社会を支える人材として必要な資質・能力が、新たに「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」として示されている。全ての資質・能力が、言葉によって獲得されることが明記されていることから、生徒は自らが生きる社会を、言葉の価値を創造する中で作り出していくことが求められていると考える。

(2) 前研究の成果と課題

本校国語科では、一昨年度までの2年間、「生徒が主体的に言葉の価値や意義を追究していく授業の創造」を主題として研究を行ってきた。特に、言葉の主体的な学び手の育成を目指し、生徒が主体的に学ぶために「学びのプロセスモデル」を設定し、粘り強く自己の学びを調整する授業を行ってきた。

本校には、設定された課題や活動に対して意欲的に取り組む生徒が多い。国語科においては、特に対話を通して自己の考えを広げたり深めたりすることの有用性を見出し、積極的に話し合いを行っている。また、学習に対する動機づけ、その中でも自律的な動機づけが高く、自分たちなりに学習の意義を見出して学習活動に取り組んでいることから、研究の成果は上がっていると判断する。一方で、内的動機づけについては、学習内容そのものの面白さや学習内容がもつ価値を見出せていない生徒が多い(全体総論P1-P2)ことから、課題があると判断する。

国語科においても、生徒が自ら課題設定から学びの自己調整までを行う授業のデザインを試みってきた。その成果として、単元ごとに設定したゴールに主体的に向かう姿勢や意識が高まった。さらに、自ら言葉を吟味する態度や言葉にこだわる姿勢も見られる。しかし、単元を通して身につけた資質・能力や獲得した語彙を次の学習や自らの生活に結びつけて生かす意識は低い。加えて、自らの学びに対しても無自覚な傾向があるため、単元を通してどのような資質・能力を身につけるか、またどのような資質・能力が身についたか、さらに、その学びの変容の契機となった言葉を意識できている生徒は少ない。

このことから、今年度も引き続き、より主体的に言葉を学び、言葉を学び続けることの面白さに気づくことを通して、言葉を学ぶ本質を見出す生徒の育成を試みたい。生徒が自らの学びを自覚し、言葉を学ぶ本質に気づくことができれば、本校生徒の課題である「内的調整」の向上につながるのではないかと考える。そのためには、これまで以上に対話を通じた協働的な学びの実現が必要となる。以上より、

- ① 生徒自らが言葉の価値を見出すために、対話を通して自らの学びや言葉の捉え方を更新し、未来を創造する知の産出方法を身に付けさせること。
- ② 個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるため、自らの学びを自覚し、自己調整を行いながら、粘り強く学び続ける担い手を育てること。

という2点を今年度の研究の出発点に据えることとした。

2 本校国語科が求める方向性と研究内容

昨年度までの成果と課題をふまえ、次のような取り組みを通して言語能力の定着と充実を図り、生徒が自ら言葉の価値を創造する授業につなげたい。

(1) 国語科における「新たな価値を創造する生徒」

全体研究主題「新たな価値を創造する生徒の育成」における「新たな価値を創造する生徒」とは、創造性に富んだ生徒を指す。ここでいう「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その課題に関わる事象について自分なりに新たな意味や考え方を見出すことで解決する資質・能力」である。(全体総論P4)

これをふまえ、国語科では「新たな価値を創造する」ことを「言葉の価値を創造する」ととし、次のように定義する。

言葉を用いて行われる全ての活動を通して、生徒自身が言葉の意味や使い方を吟味、熟考することにより、自分の中に存在しなかった言葉の新たな価値に気づいたり、言葉による見方・考え方を働かせることで、既存の言葉の捉え方から脱し、新たな意義に気づいたりすること。そこから自己の言葉の世界を広げ言葉そのものの面白さや良さに気づくこと。

この「言葉の価値」については、学習指導要領(平成29年告示)の国語科の目標(3)にある「言葉がもつ価値」(「言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること、言葉を通じて人や社会との関わり自他の存在について理解を深めること」)を始点としている。

また、言葉は潜在的に価値を有し、生徒自身もこれまでの学びの中で言葉の価値をすでに捉えていることから、本校国語科では、「言葉の価値は生徒が学ぶ中で新たに創造する」ものとし、生徒が国語科を学ぶ中で言葉の捉え方が変わったり、事象への関わり方が変わったりと、生徒が自分の中で言葉の価値を更新していくことも「言葉の価値を創造する」こととする。

(2) 対話によって自らの学びを吟味する活動の実現

2年次は、生徒がより主体的に言葉の価値を創造するために、生徒たちが言葉をどのように捉え、どのようにその価値を創造するのかということについて、「自らの学びを言語化できる生徒の育成」に研究の重点を据えたい。自らの学びを仲間や教師との対話の中で言語化していく過程の中で、「主体的に学習に取り組む態度」及び「思考力・判断力・表現力」が養われていくものとする。

①言葉の価値を創造につながる「思考力・判断力・表現力」の育成

一つの言葉でも、言葉の持つ意味はさまざまであり、言葉の価値を創造するためには、辞書的な意味から脱し、言葉を文脈に応じて捉えたり、他者との対話の中で言葉の意味を捉え直したりする必要がある。新たな言葉の世界を探る活動の中で、言葉の価値を創造する学習課題の解決を通して、「思考力・判断力・表現力」を育成していきたい。また、表出された生徒の学びを見取るための工夫も併せて行っていく。

②協働的な学びを実現するためのデザイン開発

生徒が自ら言葉の価値を創造するために、言葉を学ぶことへ強い目的意識を持てる課題解決的な単元を開発する。また、その学習過程の中に、知識や技能を自在に駆使し、思考力、判断力、表現力を発揮できる場面を設定する。

これまでも小グループによる意見交換の有用性は周知されているところであり、生徒達は積極的に交流を行い、言葉の価値を自ら更新していく様子が見られることから、一定の成果が上がってきていると判断する。今後は、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の育成と昨年度までの研究課題の解決のために、他者と協働して課題を解決することができる言葉の力や、自らの資質・能力を意識して、学びの質を高めていくことができる力が求められている。

具体的には、まず、生徒が主体的に考え、動き出したいくなるような、生徒の生活の文脈に近く切実な判断や対応が必要となる学習課題や、知的好奇心を刺激することができる学習課題を設定したい。さらに、この課題は、学習者自身と他者がそれぞれに持つ知識や経験を引き出し合うことで解決していく必要があるもの、つまり、協働を通じた解決が必要となるものとし、国語科でこれまでも積極的に取り入れてきたワールド・カフェやジグソー学習などを用いてさらに深い学びにつながるものとした。また、その活動の有用性に気づき、課題解決のために生徒が自在に選択することのできる授業を構成していきたいと考える。

(3) 「学習方略」の言語化を通して行う主体的な学びの実現

「学びのプロセスモデル—国語科編」では、自らの関心や解決すべき課題に基づき①目標設定を行い、②方略計画の場面で、学びの計画を立てる。次にその計画に従って学習を③遂行する。そして、生徒は、④形成的評価と⑤方略調整を行うことによって、自らの学びを自覚し調整を加える。さらに、生徒は自らの学びを仲間と交流し、現状をメタ認知することで、方略の調整に役立てる。その調整された方略を⑥遂行し、最後に目標を達成できたかを⑦総括的評価をし、それを次の単元に生かすというサイクルを作っている。(表1)

| | 見通し | | 学習活動 | | | | 振り返り |
|---------------------|---|---|--|---|--|--|---|
| | ①目標設定 | ②方略計画 | ③遂行 | ④形成的評価 | ⑤方略調整 | ⑥遂行 | ⑦総括的評価 |
| エンゲージメント (没頭する姿) | <ul style="list-style-type: none"> ・高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。(認知・行動) ・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。(感情) | <ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを設定し、課題解決のための学習方略を考える。(認知) ・過去の学習経験を生かそうとする。(認知) | <ul style="list-style-type: none"> ・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動) | <ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びの効果を振り返る。(認知) ・自らの学習方略を調整する。(行動) | <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて学習方略を修正する。(認知) ・学習の進み具合を把握し、見直しをもつ。(認知・行動) | <ul style="list-style-type: none"> ・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・調整された学習方略に基づき、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動) | <ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びの質や成果を振り返る。(認知・行動) ・学ぶ面白さや楽しさを感じる。(感情) ・有能感や充実感をもつ。(感情) |

表1 「学びのプロセスモデル — 国語科編」

そこで本校国語科では学びのデザインとして、生徒が「自らが動き出したくなる課題」を設定し、教師が「学びのプロセスモデル—国語科編」を意識して単元の指導を行ってきた。しかし、生徒がより主体的に学びに向かい、国語科で身につけるべき資質・能力を育てていくためには、自分の言葉に対する学びの進捗状況を振り返り、調整することが必要である。目標設定の場面では、課題解決に向けて、どのような目標を設定し、その目標をどのように解決していくかについて計画を立てる。これこそが、言葉の価値を創造する第一歩になると考える。

2年次の研究では、「学びのプロセスモデル—国語科編」を生徒にも意識させる実践を行った。特に学習方略を言語化し、生徒自身が学び方を把握しながら学習を進めることを目指した。生徒は多くの学習方略の中から自身の学びに必要な方略を選びながら単元の学習活動のゴールを見通す中で、方略計画と方略調整を行う。

3年次は、必要なときに必要な方法で自己調整を行う姿を見取るためのワークシート(「学びの計画書」)の積極的な活用を試みたい。「学びの計画書」は自身が単元の学習活動をデザインすることにより、主体的に学びに向かう態度を育むことに有効であることはもちろん、生徒の学びのアンケート(5月実施)より、国語科が最も低い数値を示した「学習方法を工夫している」という質問項目においてもそのことを実感させることにも有用であると考え。さらに、言語活動のゴールに向けてどのような方略が必要かを考える力だけではなく、仲間の計画書を見ることによって自身に必要な学びを再構成したり、学習が進んでいく中で必要な情報を最も効果的な方法で取得したりする力が身につくようになる。常に必要な情報収集と調整を加えることで学習者主体の学びを実現させたい。

3 研究を支える取り組み

(1) SELF (総合的な学習の時間) との関わり

本校では、「総合的な学習の時間」における探究的な学習についても研究を重ねている。1年生から3年生まで、探究的な学習を系統的に配置し、発達段階に応じたカリキュラムを組み、最終的には生徒個人で探究できるだけの力をもつことを目標に、全職員で指導に当たっている。その過程の中で、総合的な学習の時間において生徒に身に付けさせたい資質・能力として挙げている「課題設定能力」「情報収集能力」「情報選択(分析)能力」「表現力」「自己省察力」を、各教科との連携を図りながら身に付けさせるため、教科横断的な学習を意識した年間指導計画を作成している。国語科においても、国語科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で活用できるように、また、総合的な学習の時間で身に付けた力を国語科の授業においても活用できるように、関連性を図りながら授業を展開することを意識している。また、ファシリテーションスキルでは、特に対話の質を向上させていきたい。コミュニケーションの方法が多様化していく社会の中で、生徒たちは新しいファシリテイトの力が求められている。ただ意見交流を行うのではなく、交流の目的を意識させること、相手の意見を受容するだけでなく建設的な話し合いとなるように問い返しをすること、目的を果たすために誰のどの意見が有効であったか、またどんな言葉が交流を促進したか意識すること等、生徒のファシリテーションスキルを向上させる対話活動を設定している。

(2) FUZOKUワークシート

言葉を学ぶ価値を創造する力を育むため、「語句・語彙力」の育成に力を入れる。本校ではこれまで、言語感覚を働かせることの有用性を生徒させるため、また意識的に言葉と関わる態度を育てるため、言葉のもつ価値や実生活における有用感に気付かせる取り組みを行ってきた。今年度も全学年を通し、新聞記事を活用した「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んでいる。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで、語彙の拡充とより豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。今年度も特に、「言葉」の力の基盤である語句・語彙力を育むため、生徒が新しい時代に生まれた新しい言葉や、出会ったことのない言葉に注目し使いこなしていくことを目指し、語彙の獲得を意識した問題作成を心がけている。新聞記事の内容については、言語的な内容、社会的な内容、理科学的な内容など幅広く取り上げている。

(3) 語彙指導「Word Bank (ワードバンク)」の活用

Google work space上に語彙を蓄積することによって、豊かで洗練された語彙の獲得を目指す。言葉の捉え方を更新していくために、豊かで洗練された語彙の獲得は必要不可欠である。Google work spaceを利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐに行えるように自分のクラウド上に語彙を書き留めていくようにしていきたい。語彙の保管場所を「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。FUZOKUワークシートと同様に、全学年、全教科での学びを支える語彙指導として、その土台作りを目指していく。

4 参考文献

- ・文部科学省. 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編. 東洋館出版社. 2018
- ・文部科学省. 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申). 2021
- ・文部科学省. 教育振興基本計画(令和5年6月16日閣議決定). 2023
- ・山梨大学教育学部附属中学校. 全体総論「新たな価値を創造する生徒の育成」. 2023